

男性保育者をめざした学生たちは今どうしているのか？（２） —保育職への参入・継続をめぐる男性の思いや葛藤を中心に—

What Do Students Who Studied to Become Male Childcare Workers Do Now? (2): Thoughts and Conflicts of Males about to Enter or Continue Childcare Work

(2012年3月31日受理)

富田 昌平 小野 文子
Shohei Tomita Ayako Ono

Key words : 男性保育者, 保育職への参入・継続, キャリア発達, ライフコース

要 約

本研究は、保育者養成校を卒業した男性を対象に行った質問紙調査の結果の第二報である。本稿では、男性保育者を目指した学生たちのライフコース、保育職参入後の継続・非継続の決断時における思いや葛藤、保育職への再参入・非再参入の決断時における思いや葛藤、現在養成校に通う男子学生へのメッセージを中心に検討を行った。研究の結果、①男性保育者をめざした学生たちのライフコースは多様であること（41名中26パターン確認）、②保育職の離職率は保育以外の福祉職の離職率に比して極めて高いこと（63%：9%）、③保育職参入後の継続・非継続、及び保育職への再参入・非再参入の決断時における思いや葛藤として、(a) 受け入れ園側の雇用条件面の問題や、(b) 保育職の特殊性の問題、男性保育者特有の悩みの問題があることなどが示された。今後は保育現場における雇用体制の見直しや、養成校との協同も含めた支援体制づくりの必要性などが考察された。

問 題 と 目 的

児童福祉法施行令改正により、保育職に従事する男女に共通の名称として「保育士」という名称が定められた1999年以来、保育園保育士または幼稚園教諭を目指す男性の数は急激に増加している。にもかかわらず、男性にとって保育職への就職は相変わらず狭き門である。

本研究の第一報（富田・小野，2011）では、保育者養成校を卒業した男子学生41名を対象に、キャリア発達上の危機やライフコースについての質問紙調査を実施した。得られたデータについて、過去から現在にかけての保育職経験の有無、保育職に興味を持ったきっかけ、卒業後の保育職参入・非参入の決断時における思いや葛藤を中心に分析を行った。

研究の結果、卒業生41名中、現在保育職に参入している者は9名（20%）、過去に保育職参入経験がある者

は15名（39%）、保育職参入経験がない者は17名（41%）であった。また、過去に保育職参入経験がある者の大部分は、3年以内の離職であった。保育職参入のきっかけは「出来事」と「思い」の2つに分けられ、特に男性特有と思われる回答として、「自分流の生き方への憧れ」や「生きがい・働きがいの探求」等が示された。保育職への参入・非参入の決断時における思いや葛藤としては、参入したケースでは、「勉強したからにはなりたいという思い」、「自分を受け入れてくれる園の存在」、「自分にはこれしかないという思い」等、非参入のケースでは、「新たな可能性との出会い」の他、「自分を受け入れてくれる園の不在」や「給与面での不安」、「保育者になることへの自信のなさ」、「女性の職場で働くことの難しさ」等が示された。

第二報にあたる本研究では、第一報と同様のデータをもとに、特に男性保育者をめざした学生たちのライフ

コース、保育職参入後の継続・非継続の決断時における思いや葛藤、保育職への再参入・非再参入の決断時における思いや葛藤、現在養成校に通う男子学生へのメッセージに焦点を当てて検討を行う。それにより、保育者を目指す男性に対する養成校及び保育現場における支援体制の在り方について考えていく上での一助としたい。なお、第一報でもふれたように、本研究では特に保育所保育士及び幼稚園教諭に焦点を当てるため、便宜上、保育所や幼稚園で働く者に限定して「保育職」「保育者」という言葉を使用することとする。つまり、児童養護施設や乳児院、知的障害児・者施設などその他の児童福祉施設で働く者に対してはこの言葉を使用せず、介護福祉施設で働く者と同一のカテゴリーに含めて「福祉関係」あるいは「保育以外の福祉職」という言葉を使用している。これは決して、これらの施設で働く者が「保育職」「保育者」ではないことを意味するのではなく、あくまでも本研究において論を円滑に展開しやすくするための方便にすぎないことを改めて強調し付け加えておく。

方 法

1. 被調査者と手続き

中国地方の保育者養成校2校（ともに短期大学）の男子卒業生179名に質問用紙を郵送し、約1週間後に回収した。このうち29名分が宛所不明で返送され、43名から返事があった。宛所不明を除いた回収率は28.6%であった。回答が得られた43名のうち2名は、短大卒業後すぐに専攻科に進学し、現在も在学中であり、働いた経験がなかった。従って、以下の分析では、この2名を除いた41名分を対象とする。

なお、今回対象とした保育者養成校のうち1校は専攻科介護福祉専攻（1年課程）の設置校であり、男子学生の場合、卒業後そちらに進学する者も多数存在する。その意味では、本研究のデータは一般的な保育者養成校とは異なる特殊性を持ったデータであることを考慮して扱う必要がある。

2. 調査項目

調査用紙はA4サイズであり、フェイスシート1頁を加えた計6頁で構成された。質問項目は、年齢、卒業年、

現在の職業、過去の職業の履歴、保育職経験の有無、保育職に興味を持ったきっかけ、養成校入学の決め手、卒業直後に保育職に就いた理由・就かなかった理由、保育職を途中退職した理由・現在まで続けている理由、保育職に再就職した理由・再就職しなかった理由、きっかけから現在に至るまでのライフコースの図式化、現在養成校に通う男子学生へのメッセージなどであった。

3. 調査実施時期

2007年11月から12月。

結果と考察

1. 男性保育者を目指した学生たちのライフコース

「現在の職業」「過去の職業の履歴」「きっかけから現在に至るまでのライフコースの図式化」という3つの質問に対する回答をもとに、被調査者の保育者養成校卒業から現在に至るまでのライフコースを分析した。

ライフコースは大きく3つに分けられ、それぞれ次の3つの表にまとめることができた。表1は、卒業後に保育職に参入し、現在も継続しているタイプ（タイプⅠ）であり、41名中9名（22%）がこれに該当した。表2は、卒業後に保育職に参入したが退職、現在は保育職でないタイプ（タイプⅡ）であり、41名中15名（37%）がこれに該当した。表3は、卒業後に一度も保育職に参入した経験がないタイプ（タイプⅢ）であり、41名中17名（41%）がこれに該当した。

それぞれの表をより詳細に見ていくと、表1に示すように、現在保育園または幼稚園で保育者を続けている9名の内訳は、公立5名、私立3名、認可外1名であった。高校卒業後最初の進学先が保育者養成校であり、そして養成校卒業後または専攻科進学・卒業後すぐに保育職に従事し、そのまま現在に至る者は9名中5人であった。残りの4人は養成校への進学以前に保育職とは無関係の大学に進学した経験がある、あるいは卒業後一度は一般職に勤務した経験があるなど、保育職参入以前に進学先や勤務先とのミスマッチを経験したことがある者たちであった。また、9人のライフコースはさらに7通りに分けられ、男性保育者のライフコースの多様性がうかがえる結果となった。

男性保育者をめざした学生たちは今どうしているのか？（2）

表1 卒業後に保育職に参入し、現在も継続しているタイプ（タイプⅠ：9名）

現在の勤務先	ライフコース	年齢	人数
公立保育園	X → Y	26歳	5名
	X → 専攻科（幼児） → Y	27歳，35歳	
	四大 → X → Y	29歳	
	四大 → 一般職 → X → Y	30歳	
私立保育園	X → Y	25歳，26歳	3名
	四大 → 一般職 → X → Y	39歳	
認可外保育園	X → 一般職 → Y → 専攻科（幼児） → Y	31歳	1名

注：Xは養成校時代，Yは保育職時代を指す。

表2 卒業後に保育職に参入したが退職，現在は保育職でないタイプ（タイプⅡ：15名）

現在の勤務先	ライフコース	年齢	人数
児童福祉	X → Y → 児童福祉	39歳	1名
介護福祉	X → Y → 介護福祉	24歳	3名
	X → Y → 専攻科（介護） → 介護福祉	23歳	
	X → 専攻科（幼児） → Y → 介護福祉	28歳	
福祉（不明）	X → Y → 福祉（不明）	29歳，31歳	2名
市役所	X → Y → 市役所	36歳	1名
学習塾	X → Y → 四大 → 一般職 → 学習塾	43歳	1名
進学	X → 専攻科（介護） → Y → 専門学校	24歳	1名
一般職	X → Y → 一般職	22歳，23歳	6名
		24歳，27歳	
		30歳，36歳	

注：Xは養成校時代，Yは保育職時代を指す。

表3 卒業後に一度も保育職に参入した経験がないタイプ（タイプⅢ：17名）

現在の勤務先	ライフコース	年齢	人数		
児童福祉	X → 児童福祉	22歳，24歳	3名		
	一般職 → X → 児童福祉	26歳			
介護福祉	X → 専攻科（介護） → 介護福祉	23歳，23歳 24歳，24歳 25歳，29歳	9名		
	X → 介護福祉 → 専門学校 → 介護福祉	32歳，33歳			
	X → 専攻科（介護） → 福祉（不明） → 専門学校 → 介護福祉	30歳			
	福祉（不明）	X → 福祉（不明）		24歳	2名
		X → 専門学校 → 福祉（不明）		30歳	
一般職	X → 福祉（不明） → 一般職	24歳	3名		
	X → 専攻科（介護） → 一般職	29歳			
	X → 専攻科（介護） → 介護福祉 → 一般職	28歳			

注：Xは養成校時代，Yは保育職時代を指す。

次に表2を見ていくと、こちらにも実に多様なライフコースが描かれた。15名のうち最も大きなグループは6名によるものであり、養成校卒業後すぐに保育職に従事し、その後退職、現在は一般職に従事している者たちであった。この6名を除くと大部分が異なる経路を描いており、9名で8つの経路が確認された。それぞれに養成校卒業後または専攻科進学・卒業後すぐに保育職に従事したという経路までは共通しているが、その後退職してからの経路は大きく異なっていた。保育職に参入していた年数に注目すると、5年以上にわたって保育職に従事した経験を持つ者は15名中2名のみであり、残る13名はすべて1年から3年という短い期間で退職していた。5年以上保育職に従事した2名のうち1名は、公立保育所に12年勤めた後、市役所に異動を命じられたという者であり、もう1名は、20歳から27歳までの7年間保育職に従事し続けたが、その間に3度勤務先が変わり、最終的には任期が切れ、その時点で結婚し家族がいたために保育職の継続を断念したという者であった。男性による保育職の継続及び再参入の困難さがうかがえる結果といえよう。

最後に表3を見ていくと、こちらにもやはり多様なライフコースが描かれた。17名のうち最も大きなグループは6名によるものであり、養成校卒業後すぐに専攻科（介護福祉専攻）に進学し、1年間介護の専門職としての知識・技術を学んだ後、介護福祉施設に就職した者たちであった。全体的に見ると、何らかの福祉職に従事している（あるいは従事した経験がある）者は17名中16名（94%）であり、そのうち福祉職に従事した後、退職してそれ以外の職業に就いた者は2名のみであった（いずれも一般職）。この保育以外の福祉職における離職率の低さは注目すべき点である。先ほどの表2を再度確認してみても、保育職を退職後、保育以外の福祉職に就いた者6名のうち、離職者は皆無であり、合わせて考えると保育以外の福祉職への従事経験者22名のうち、離職者はわずか2名で離職率9%となる。このことは保育職における離職率63%（24名中15名）と比較して大きな特徴であり、こうした結果を見てみても、男性保育者になることを目指して養成校に入学した男子学生たちに、卒業後の第2の選択肢として介護福祉士への道を用意し、その就職に向けての支援を行うといった養成校の方法は正しいと言える

だろう。

表1から3をまとめると、被調査者41名のライフコースは全部で26に分けられた。これはつまり、ある保育者養成校に男子学生が10名ほどいた場合、卒業後に自分と同じ経路を歩む者は自分の他に1名いるかいないかに過ぎないという確率となる。人生の経路は人それぞれであり、一人ひとりが自分なりの道をしっかりと見定め、悩み、考え、決断することの大切さを改めてうかがい知ることのできる結果といえよう。

2. 保育職参入後の継続・非継続

「保育職を途中退職した理由・現在まで続けている理由」という質問に対する回答をもとに、被調査者が保育職参入後に感じた思いや葛藤の内容を分析した。

表4は、保育職を辞めた理由についてまとめたものであり、表5は保育職を継続している理由についてまとめたものである。前者に関しては該当者15名全員から回答が得られ、後者に関しては該当者9名中6名から回答が得られた。表中のパーセンテージは各回答者15名と6名を母数としたものである。被調査者の回答は、それぞれ単一のカテゴリーに収まりきるものではなく、複数のカテゴリーにまたがるものであった。従って、回答は各カテゴリーに排他的ではなく、複数にまたがって分類されている。分析の結果、辞めた理由は11のカテゴリーに分けられ、継続している理由は6つのカテゴリーに分けられた。

保育職を辞めた理由は広範囲にわたった。最も多く挙げられた回答は「経済的な困難さ・将来性のなさ」と「任期切れ」であったが、それでも回答者の27%に過ぎなかった。「経済的な困難さ・将来性のなさ」は、第一報（富田・小野、2011）の「保育職の参入・非参入の決断時における思いや葛藤」においても「給与面での不安」（参入者の5%、非参入者の32%）と「いつまで続けられるかという不安」（参入者の5%、非参入者の16%）というかたちで挙げられていたが、参入・非参入の決断時での不安が現実のものとなったということができよう。また、「任期切れ」についても同分析結果において「自分を受け入れてくれる園の存在・不在」（参入者の30%、非参入者の37%）が挙げられており、男性保育者を一年間のお試しという任期付きで採用し、その後カットすると

表4 保育職を辞めた理由（15名）

カテゴリー	具体的な記述例	人数	%
経済的な困難さ・将来への不安	<ul style="list-style-type: none"> ・環境面、金銭面などでその保育所ではやっていく気は薄れていた。（28歳，福祉関係） ・将来性がない。（29歳，福祉関係） ・臨職だったので先が不安だった。経済的に難しかった。（30歳，一般職） 	4	27%
任期切れ	<ul style="list-style-type: none"> ・もともとが産休の先生の替りでの非常勤採用だった。（28歳，福祉関係） ・一年契約だったので理由はありません。（22歳，一般職） ・最初から1年間で次々の進路を考えるつもりだったため。（23歳，福祉関係） 	4	27%
体調不良	<ul style="list-style-type: none"> ・保育士1年目で、体調不良、仕事をなかなかこなすことが困難で、大変でした。（24歳，福祉関係） ・ヘルニアによる長期の職場からの離脱。担任から外れ主任先生に迷惑をかけてしまった。（36歳，一般職） ・精神的に体調をくずしてしまったから。（23歳，一般職） 	3	20%
居場所のなさ	<ul style="list-style-type: none"> ・男一人だけでやっていくには、いろいろ大変で、相談が気軽にでき悩みを打ち明け共感できる者が身近にいなかったため、自滅して、やめることになった。（27歳，一般職） ・保育所に就職し勤めだしてみると、やはり女の人の職場であり、男子が勤めるには無理があった。（24歳，福祉関係） ・3カ所で働いた。1カ所全く男性の事を理解してもらえず、ずっとお客様扱いでまともに取りあってもらえなかった。（31歳，福祉関係） 	3	20%
仕事内容に対する不満	<ul style="list-style-type: none"> ・公務員試験をパスし、公立の保育所へ就職したのだが、何をすることにしても、（子どもに遊びなど）、その主旨、目的、そして人権問題にふれていないかどうかを書面で提出し、厚生課、部落解放同盟の許可が必要で、子どもが望んでいても、実現させることができなかった。（43歳，教育関係） ・子どもといるのはとても楽しいことだったけど、思った保育が出来なかったし、させてもらえなかった。（23歳，一般職） 	2	13%
人間関係	<ul style="list-style-type: none"> ・上司との関係。（24歳，一般職） ・周りの先生ともうまくやれず…。（23歳，一般職） 	2	13%
仕事の忙しさ・大変さ	<ul style="list-style-type: none"> ・保育園で働いて、家に帰って寝るまでの間は常に仕事をして、寝る時間を削ってしまうこともしばしばありました。（24歳，福祉関係） ・また、子どもたちが家に帰った後も他に雑用がいろいろあり、退社時間がのびてルーズになったりした。（24歳，福祉関係） 	2	13%
自信のなさ・力量不足	<ul style="list-style-type: none"> ・自分には、保育をしていく力はすごく不足しているんだなと悩みました。（24歳，福祉関係） ・自分が通用しなかった。（31歳，福祉関係） 	2	13%
意欲の低下	<ul style="list-style-type: none"> ・最低でも一年以上は働きたいと思っていたが、働いていく事に対しての自分の気持ち、日々の仕事に対する考え方がマイナス面へ変わっていき、続けるとしても別の園で、と思ったため。（24歳，一般職） 	1	7%
別の進路への興味	<ul style="list-style-type: none"> ・どうしても障害児施設に就職したかった。（39歳，福祉関係） 	1	7%
職場内での異動	<ul style="list-style-type: none"> ・公立保育所（幼稚園）採用の公務員だったので、今は市役所へ異動となりました。（36歳，市役所） 	1	7%

表5 保育職を継続している理由（6名）

カテゴリー	具体的な記述例	人数	%
子どもとのかかわりの楽しさ	・子どもと関わっているとやりがいや、楽しさ等を感じられるから。（29歳，公立保育園） ・子どもとの関わりが楽しいから。（26歳，私立保育園）	4	67%
仕事に対する満足感	・自分のやりたい道である。（30歳，公立保育園）	2	33%
公立勤務による条件面のよさ	・公立保育園というきちんとした後ろだてがあるから。（27歳，公立保育園） ・公立であるため，給料，休みなどが安定している。（30歳，公立保育園）	2	33%
経験年数の短さ	・まだ2年目なので，退職なんて考えられません。たとえ仕事が大変だとしても。（29歳，公立保育園）	1	17%
養っていく家族の存在	・結婚したのでやめられなくなった。（27歳，公立保育園）	1	17%
退職理由のなさ	・特に退職する理由はなかった。（39歳，私立保育園）	1	17%

いった受け入れ側の実態が浮かび上がる結果となった。また、「体調不良」(20%)、「仕事の忙しさ・大変さ」(13%)、「自信のなさ・力量不足」(13%)、「意欲の低下」(7%)など、精神的・肉体的疲弊を理由として挙げる回答もいくつか見られた。これらの悩みや葛藤は、教職や保育職など対人援助職に特有のものとして見ることができる。例えば、田上・山本・田中(2004)は、教師のストレスに影響を及ぼす要因を、①教師という職業が潜在的に持つ特殊性(職業の特殊性)、②教師個人が持つ特性と教職との折り合い(個人特性)、③教師個人が属する職場環境の問題(環境の特異性)の3つにまとめている。このうち1つめの「職業の特殊性」がここでは最も大きくかわると思われるが、その特殊性はさらに「再帰性」「不確実性」「無境界性」の3つにまとめることができる。再帰性とは、教師の行う教育活動の責任や評価が、対象である生徒やその保護者によってなされる点を指す。不確実性とは、教える対象が変われば、同じ態度や技術を用いて対応しても、同じ反応や効果が得られるわけではなく、常に臨機応変の対応が求められるといった点を指す。無境界性とは、教師の仕事の範囲や責任領域が際限なく拡張されがちである点を指す。このように教師という職業は他の職業と比べても曖昧な部分を多く含んでおり、そのことが教師のメンタルヘルスを脅かす要因になっていると考えることができる。そしてこれらは当然保育者にも当てはまることである。

本研究における被調査者の回答からは、仕事を終えて

家に帰った後も寝るまで仕事を抱え、時に寝る時間を削ってまで仕事を行い、それでも日々の保育がうまく回っていかないことに自分の力量のなさを感じ、そうして徐々に仕事に対する前向きな意欲を失い、精神的にも肉体的にも疲弊して、ついには保育職を辞めてしまうといった一部の保育者の実態が浮かび上がってきた。これらは男性に限らず、女性も含めた保育者全般に言えることであり、こうした負のスパイラルに陥りやすいという職業の特殊性を十分に理解した上での支援体制づくりが、保育現場でも養成校でも今後求められると言えよう。その他には、「居場所のなさ」(20%)、「仕事に対する不満」(13%)、「人間関係」(13%)など、男性保育者に特有と思われる悩みや葛藤の内容も挙げられた。これらに関しては、前述の第一報(富田・小野, 2011)の「保育職の参入・非参入の決断時における思いや葛藤」においても同様の内容が示されており、「居場所のなさ」と「人間関係」に関しては、「男性としての立ち位置のあいまいさ」(参入者の10%、非参入者の11%)、「女性の職場で働くことの難しさ」(参入者の5%、非参入者の16%)、「仕事に対する不満」に関しては、「自分にはこれしかないという思い」(参入者の15%)、「なりたい保育者像の存在」(参入者の5%)などが関連するものと思われる。前者に関しては、先行研究(西野, 1997; 中田, 2000, 2002など)でもたびたび取り上げられてきたように、男性による保育職への参入・継続を困難にさせている大きな要因として再度捉えることができよう。他方、後者に関し

ては、先行研究ではあまり取り上げられてこなかった内容であると言える。第一報でも指摘したように、男性保育者に顕著な思いとして、「自分流の生き方へのあこがれ」や「生きがい・働きがいの探求」が挙げられる。「こうしたい・ああなりたい」という思いや欲求は、(少なくとも保育者志望学生においては)女性よりも男性に顕著であり、そうした高い理想や志が現実に保育者となって働き始めたときに激しく打ち砕かれるケースが、男性保育者においては特に多いものと思われる。「仕事に対する不満」は、男性の「こうしたい・ああなりたい」という思いや欲求に対して、保育の現場の現実が壁として立ち上がったとき、そこに生きにくさや働きにくさを感じ、不満というかたちで現れたものであると言えよう。次に、保育職を継続している理由として最も多く挙げられたのは「子どもとのかかわりの楽しさ」(67%)であった。これは現職の保育者との日々の会話の中でもしばしばみられることであり、とにかく仕事は忙しく大変で、精神的にも肉体的にも疲弊することが多々あるが、それでも続けていられるのは、結局のところ保育の対象である子どもとのかかわりが楽しいからに他ならない、このことに尽きるという意見である。その他としては「仕事に対する満足感」(33%)、「公立勤務による条件面のよさ」などが挙げられた。前者に関しては、先ほど挙げた男性に顕著な思いや欲求としての「自分流の生き方へのあこがれ」や「生きがい・働きがいの探求」が一定程度満たされていることによるのかもしれない。後者に関しては、男性の保育職参入・継続を困難にさせている大きな要因の一つとしての「経済的な困難さ・将来性のなさ」という不安要素が、公立勤務においてはかなりの部分取り除かれることを表していると言えよう。

3. 保育職への再参入・非再参入

「保育職に再就職した理由・再就職しなかった理由」という質問に対する回答をもとに、被調査者が保育職から離れた後、再参入の可能性を吟味した時に感じた思いや葛藤の内容を分析した。

表6は、保育職に再参入した理由についてまとめたものであり、表7は保育職に再参入しなかった理由についてまとめたものである。前者に関しては再参入の定義があいまいであったため(すなわち、保育職に従事した後、

一度は退職、保育職以外の職業に従事した後、再度保育職に参入した者を再参入とするのか、途中保育職以外の職業に従事しなくても、勤務先の園が変わるだけで再参入とするのかなど)、該当者の正確な人数を把握することができず、結果的にわずか2名の回答しか得られなかった。後者に関しては該当者17名全員の回答が得られた。表中のパーセンテージは各回答者2名と17名を母数としたものである。各カテゴリーへの回答の分類は、先の分析と同様に排他的であり、複数にまたがって分類されている。分析の結果、保育職に再参入した理由は2つのカテゴリーに分けられ、保育職に再参入しなかった理由は8つのカテゴリーに分けられた。

保育職に再参入した理由について回答した者は2名のみであったが、1名は「養成校卒業→一般職→認可外保育園→専攻科(幼児)→認可外保育園」という経路を辿った者であり、もう1名は「養成校卒業→児童福祉→私立保育園」という経路を辿った者であった。回答者以外の者の中には、ある保育園から別の保育園、さらに別の保育園というように、何度も保育職への再就職を繰り返してきた者もいたが、これらについて回答は得られなかった。このように、保育職というカテゴリー内での再就職を繰り返してきた者は、潜在的には複数名存在していたものと思われるが、その経路については詳細に書く者もいれば省略して書かない者もいて、実質的な人数を把握することはできなかった。これら2名によって挙げられた理由としては2つであり、1つは「再就職先の存在」がたまたまあったからというもの、もう1つは「仕事の楽しさ」というものであった。

次に、保育職に再参入しなかった理由について分析を行った。その結果、表7に示すように、「現状に対する満足感・別の進路への興味」(59%)と「経済的な困難さ」(41%)が理由として多く挙げられた。前者に関しては、今の仕事が充実しているため、あるいは保育職以外の職業で興味を惹かれるものが見つかったため、わざわざその仕事を辞めてまで保育職に転職する理由が見当たらなかったというものである。後者に関しては、ここまで何度も指摘されてきたように保育職の賃金の低さを指摘するもので、このような低賃金ではとうてい家族を養っていくことなどできないため、保育職への転職は考えられなかったというものである。その他に関しては、「居場

表6 保育職に再参入した理由（2名）

カテゴリー	具体的な記述例	人数	%
再就職先の存在	<ul style="list-style-type: none"> 現在の保育所に就職できるチャンスが舞い込んできたから。（31歳，認可外保育園） 男性を欲しがっているということだったので，面接を受けに行った。正規職員になれるという事で再就職を決めた。（25歳，私立保育園） 	2	100%
仕事の楽しさ	<ul style="list-style-type: none"> 一年近く一般職（アルバイト）で過ごしたが，その間保育所や幼稚園に就職し，苦勞しながらも楽しんでいる女性保育者の話をたくさん聞いていたこともあり，それをキッカケにまた保育の道にあかりが点ったような気がする。（31歳，認可外保育園） 	1	50%

表5 保育職を継続している理由（6名）

カテゴリー	具体的な記述例	人数	%
現状に対する満足感・別の進路への興味	<ul style="list-style-type: none"> 現在の高齢者福祉が自分に合っている気がするから。（30歳，福祉関係） 障害を持つ方に惹かれ，健康な人たちの支援（保育）に興味がなかったから。（24歳，福祉関係） 今している介護にやりがいがあるから。（25歳，福祉関係） 介護の仕事に楽しさを覚えて，仕事とするならこっちでやりたいと思ったから。（23歳，福祉関係） 他にやりたい事がみつかった。（30歳，一般職） 	10	59%
経済的な困難さ	<ul style="list-style-type: none"> 賃金の低さ。（22歳，福祉関係） 給料などの収入面で，家族が出来た時を考えた時の不安があり，諦めました。（24歳，福祉関係） 男性としての所得の関係で，決断として難しかったです。（28歳，一般職） 得られる給与が少ないため。（23歳，福祉関係） 最後の所の契約切れで，その時点で家庭があり，バイトからの低賃金では生活がなりたたなくなったため。（31歳，福祉関係） 	7	41%
居場所のなさ	<ul style="list-style-type: none"> 私の住んでいる所は，保守的でいまだに，「男性はいらない」という幼稚園・保育所が多い点。（43歳，教育関係） 男性としての居場所がない（保育ではどうしても女性中心としてみる。母親＝女性には勝てない）。（23歳，福祉関係） 	2	12%
自信のなさ・力量不足	<ul style="list-style-type: none"> 実習を通して，自分にはクラスをまとめる力がないことを自覚し，自信をなくしたため。（23歳，福祉関係） 幼稚園・保育園へはあまり向いていないように思える。（25歳，福祉関係） 	2	12%
仕事の忙しさ・大変さ	<ul style="list-style-type: none"> 保育園に就職した友だちから，保育園での苦悩を聞いてしまった。（23歳，福祉関係） 指導案など書類が多い。（23歳，福祉関係） 	2	12%
早期退職者の多さ	<ul style="list-style-type: none"> 知り合いの男性保育士も1年程で辞めてしまう人がほとんどで，話を聞いたり…。（24歳，福祉関係） 	2	12%
勤務経験のなさ	<ul style="list-style-type: none"> 保育の経験もないため，再就職は考えられなかった。（24歳，福祉関係） 	1	6%
求人少なさ	<ul style="list-style-type: none"> 募集の少なさ。（28歳，一般職） 	1	6%

所のなさ」（12%）、「自信のなさ・力量不足」（12%）、「仕事の多さ・大変さ」（12%）、「早期退職者の多さ」（12%）など、男性による保育職への参入・継続を困難にさせる要因としてこれまで指摘されてきた問題がここでも繰り返して示された。こうした問題点を、同様に保育者養成校を卒業した友人から伝え聞くことによって、保育職への参入意欲はさらに減退し、結果的に保育職への再参入は断念されるようであった。

4. 現在養成校に通う男子学生へのメッセージ

「現在養成校に通う男子学生へのメッセージ」の回答欄への記述は、41名中40名（98%）で見られ、自分たちと同じ道を歩もうとする後輩たちに向けて、それぞれに強い思いを持っていることがうかがえた。大部分は若い後輩たちに向けての激励の言葉であるが、加えて、男性が保育職に参入する上で心掛けておくべきこと、決して甘い世界ではないことを踏まえて強い決意や覚悟を持つよう促す言葉、現代社会における男性保育者の必要性を訴えかける言葉、保育職以外の選択肢にもオープンであるよう促す言葉など様々であった。また、その他にも、現在は保育職から離れているが、もう一度やってみたいという思いは残っているとする記述や、自分は最終的に保育職を続けていくことをあきらめたが、後輩に思いを託したいとする記述なども見られた。以下にその具体例のいくつかを紹介する。

がんばって！

【事例2】ぜひともがんばって保育者になってほしいです！正直まだまだ男の人は少なく、とってもしびしいです。もっと男の人が増えれば良い意味でこの職の環境なども変わっていくと思います。学生のうちは勉強ももちろんしっかりした方がよいですが、その他にもいろいろなものに積極的に取り組んでいって下さい。（27歳、四大卒業後に養成校に入学、現在は公立保育園に勤務）

【事例5】保育士は、人間の基礎が学べ、とても素晴らしい職業だと今でも感じます。子どもたちにとって男性保育士は必要だと思うし、向いている人は頑張してほしい。向いてないと思っても、保育を勉強して、気付くことがたくさんあると思うので、しっかり勉強し、自分の将来を考えてほしいです。頑張ってください!!（24歳、卒業後

から現在まで介護福祉施設に勤務）

相談できる相手を見つけて！

【事例9】地域性や園によって違うとは思いますが、保・幼の現場はまだまだ女性社会です。良しにつけ悪しきにつけ、女性らしい考え方（あまり良い表現ではありませんが）、物事の運び方が根強く残存しています。職場や周りに同性の同業者等相談できたり、頼れる人がいるとまだ良いですが、そうでなければかなり辛い日々を送ることも考えられます。初めて就職した頃の熱い気持ちや情熱も良く分からなくなることもありました。今、私はとても毎日充実してやりがいのある仕事にたどりつけたと思っています。良い仕事仲間にも巡りあえました。次代を担う子どもたちにとって、よりすばらしい保育環境となることを願っています。（36歳、公立保育園に12年間勤めた後、現在は市役所に異動）

【事例22】相談できる友達を大切に。子どもは保育していく上でのプレッシャーにならないが、周りの人間のプレッシャーにつぶされそうになる。友達に悩みを打ち明ける勇気もしっかり持つこと。解決は一人では、ほぼ無理。（27歳、保育園に1年間勤めた後、現在は一般職）

中途半端な気持ちではダメ！

【事例18】中途半端な気持ちで保育士を目指しているなら保育所等への就職はしない方がよいと思う。確固たる思いがあつての職場だと思う。（女性が多い職場を甘く見ないほうがよい。）自分の実体験から言うと過剰な理想は持たない方がよい。ただ、年を追うごとに自分のカラーを出していけばよい。（28歳、保育園に1年間勤めた後、現在は介護福祉施設に勤務）

【事例40】世間を少しでも知って、この世界に入りなさい。特別な世界（女性の職場）なので甘く考える人にとっては、魅力がありません。遠回りして、それでもやりたかったら、覚悟を決めて保育士になるべき。しっかり遊んで、世の中を知ること。自分が遊べない人は、子どもに遊びを教えられません。女性と一緒にでは意味がないし、男性保育士である以上、付加価値のある、人間的に魅力のある人間であること。（30歳、四大卒業後に一般職を1年間経験、その後保育者養成校に入学し、現在は公立保育園に勤務）

他の選択肢にもオープンに！

【事例25】夢や希望を持つことは自由だと思いますが、実際、男性として家庭を持ち、生活の柱になるためには、所得の問題、将来の安定を求めると思うので、人それぞれだと思いますが、自分がずっと長い目で見て、続けられて人並みの手厚い給料をもらえる仕事も選択肢の1つだと思います。(28歳、介護福祉施設に勤めた後、現在は一般職)

【事例27】保育士という資格は、知的障害児・者、肢体不自由児・者など様々な施設で活かすことができます。道は一つではなく、広い視野で将来を考えても良いかもしれません。人相手の仕事は心と心の繋がりを大切にできる人がなれる職業だと思います。(24歳、卒業後に児童福祉施設を転々とし、現在は知的障害者施設に勤務)

今もまだやりたいと後悔する時も…

【事例8】幼児と関わる仕事はとても大変です。仕事は何でも大変なのですが…。学校を出て保育の仕事に就いて、大変だったので退職してしまいましたが、今はまた、保育園に務めたいと後悔する時があります。今の仕事を辞めて保育の仕事に。保育園はやりがいのある職場だと思います。女の先生同士の関係っていう世界を見てしまうこともあります。保育園で働きたいと思っている人は、保育の力が足りないと思うのではなく、もっと理想の先生を目指して頑張りたいと思います。(24歳、保育園に1年間勤めた後、介護福祉施設に勤務)

【事例39】自分自身、夢を持って一度は就職した保育士の仕事。条件等の理由で転職しましたが、30才になった今でもチャンスがあったら保育士になりたいと後悔しています。一時的にいろいろ悩んだりすることもあるけど、自分を見失わず、今の気持ちを貫いてほしいです。(30歳、保育園に2年半勤めた後、現在は一般職)

後輩に思いを託す

【事例34】自分が就職した頃と違い、男性保育士の認知度は上がっていると思う。昔は「いつでもやめていいよ」という空気だったが、今は歓迎してもらえると思う。自分は最後までやりとげることができなかったが、必ず居て良かったと分かってもらえる時が来ると思うの

で、頑張ってもらってほしい。自分が何か力になれることがあれば、何でも良いからお手伝いをさせてもらいたい。(31歳、保育園に7年間3つの園を転々と勤めた後、現在は福祉関係の仕事に勤務)

ま と め

本研究では、男性保育者を目指して保育者養成校に入学し、保育士資格及び幼稚園教諭一種免許状を取得して卒業した男子学生のその後のキャリア発達上の危機やライフコースについて、質問紙調査を通して検討を行った。本稿は研究の第二報として、男性保育者を目指した学生たちのライフコース、保育職参入後の継続・非継続の決断時における思いや葛藤、保育職への再参入・非再参入の決断時における思いや葛藤、現在養成校に通う男子学生へのメッセージを中心に検討を行った。結果は以下の2点にまとめることができる。

第1に、男性保育者を目指した学生たちのライフコースは様々であり、41名で26パターンが確認された。それらは大きく、卒業後に保育職に参入し、現在も継続しているタイプ(タイプⅠ)、卒業後に保育職に参入したが退職、現在は保育職でないタイプ(タイプⅡ)、卒業後に一度も保育職に参入した経験がないタイプ(タイプⅢ)の3つに分けられた。一度でも保育職に就いたことがある者と保育以外の福祉職に就いたことがある者のそれぞれについて離職率を算出したところ、前者では63%(24名中15名)にも上ったのに対し、後者では9%(22名中2名)に過ぎないことが示された。このことは男性による保育職への参入・継続の困難さを示す結果といえよう。第2に、保育職参入後の継続・非継続、及び保育職への再参入・非再参入の決断時における思いや葛藤についての分析では、男性による保育職への参入・継続を困難にさせる要因としての受け入れ園側の雇用条件面の問題(「経済的な困難さ・将来性のなさ」「任期切れ」など)や、保育職の継続を脅かす職業の特殊性の問題(「体調不良」「仕事の忙しさ・大変さ」「自信のなさ・力量不足」「意欲の低下」など)、男性保育者特有の悩み(「居場所のなさ」「仕事に対する不満」「人間関係」など)が挙げられた。保育現場における雇用体制の見直しや、養成校との協同も含めた支援体制づくりの必要性がうかがえ

る結果といえよう。

従来の男性保育者研究では、女性保育者や保育園・幼稚園の保護者、保育者養成校の学生、男性保育者を対象とした研究がほとんどであり、保育者を目指して保育者養成校に入学し、資格・免許を取得して卒業した男性全体に焦点を当てた研究は皆無であった。本研究では初めて彼らに焦点を当て、その結果、保育者養成校を卒業した男性に見られるキャリア発達上の危機やライフコースの実像をある程度浮き彫りにすることができたのではないかと考えられる。

男性にとって保育職への参入・継続は、以前（例えば、「保育士」という名称が定められた10年ほど前）と比べてずいぶん身近で、困難さも軽減されたことは確かである。しかし、雇用条件の見直しや支援体制づくりなど、男性が保育者となる夢をかなえて、その仕事に誇りを持って勤め続けられるだけの条件面その他の整備は、まだまだ十分とは言えない。本研究ではその一端を示したに過ぎないが、今後はさらに地域的に幅広いデータを加えて、検討を積み重ねていくことが必要であると思われる。

引用文献

- 中田奈月. (2000). 男性保育者のライフコース：キャリアの実態を通して. 奈良女子大学社会学論集, 7, 67-78.
- 中田奈月. (2002). 「男性保育者」の創出：男性の存在が職場の人間関係に及ぼす影響. 保育学研究, 40, 196-204.
- 西野美佐子. (1997). 男性保育者のキャリア発達：その危機と克服. 社会福祉研究室報, 7, 81-92.
- 田上不二夫・山本敦子・田中輝美. (2003). 教師のメンタルヘルスに関する研究とその課題. 教育心理学年報, 43, 135-144.
- 富田昌平・小野文子. (2011). 男性保育者をめざした学生たちは今どうしているのか？（1）：保育専攻を卒業した男子学生への質問紙調査から. 中国学園紀要, 10, 97-108.

付記

調査にご協力いただきました男子卒業生の皆様に、深く感謝いたします。それぞれの現場における益々のご活躍を祈念いたします。

なお、本研究は、中国学園大学・中国短期大学平成19年度特別研究助成を受けた。

